

現代文明と宗教対話

任 継愈

菅野博史 訳

(一)

二十世紀後期から、世界は経済の一体化の状態に入った。経済生活はほとんど国や地域の制限を受けない。世界の一部で、経済危機が生じると、すぐに世界に波及する。このような情況は、一、二百年前には存在しなかった。現在、地球各地を旅行する人はみな、どの大都市のデパートに陳列されている日用商品も世界の多くの国の工場で製造されたものであることを発見するであろう。飛行機、自動車、船舶やその部品のように

に少し複雑な構造の工業製品は、すべて一つの国や地域からのものではなく、最後に一つに組み立てられたものである。このような現象は、経済の一体化を生活の細部に反映していることを物語っている。

現代人はまさに矛盾、困惑の満ちる世界に生活している。このことは多くの面に現われているが、いくつかの現象を取り上げて分析しよう。

「制作（創造を含む）に巧みで、使用に拙い」。二十世紀の後半期、工業技術は空前の発展をし、人類は現在持っている手段によって、製造できないものはないと

吹聴している。中国の古人は、手工業の職人の優れた技術を「天然のものより巧みである」と称賛したが、今日は問題とならない。地球は星雲の進展変化により、数億年かかって、やっと今日の様相となった。ある人は、原子爆弾によって、数分の内に地球を何度も破壊することができると公言した。まさか一度の破壊で不十分とでもいうのであろうか。

人間は遺伝子を変えて新種を作ることができ、神でさえ作らなかった狂牛病、エイズ、工業酸性雨のような人工の新生産物は、無頓着に今日の人間の手から生まれた。

自ら作り出した生産物について、あるときは、人類はそれを取り扱う方法を知らない。いくつかの大国には、大量の原子兵器があり、武器庫が存在するが、どのように使用するかを知らず、どの地域に投擲するかを確定することができない情況である。それを持って、さるけれども、またそれを制御することが難しく、さらに他の国の模造を恐れ、科学技術の先進的な発展の結果、かえって負担となってしまうた。

「生産に巧みで、分配に拙い」ことも、現代人の遭遇した新しい矛盾である。食糧を例とすると、一方では、食糧は倉庫に寝かせておかれ、古いものは変質すると同時に、また多くの飢餓の民がいて、毎年、栄養不良によって死亡する児童は数十万から百万に達する。一方では、大量の紡績品を製造する能力があるが、これと同時に、幾千幾万の着るべき衣服のない貧困者たちが出現し、ある部族全体がまだ全裸の原始生活を過ごしている情況がある。

「物質的生産物が豊富で、精神生活が比較的貧しい」ことは、また一つの矛盾である。情報の交換は空前の発達をしたが、心の隔たりは絶えず深まっていく。心の隔たりのため、誤解、敵対、憎悪を引き起こし、ひいては流血の戦争をもたらし、死亡者の人数を絶えず増加させている。自然の死亡は、生物の法則であり、遺憾に思うべきではない。正常でない死亡は、通常の死亡を大いに越えている。この異常な現象が多く見られるようになって、慣れつことなり、かえって人は奇妙なものを見ても当たり前と思うようになった。医学

が発達し、肢体の移植から内臓の移植まで行なわれ、生存率は年ごとに高くなり、数十人の専門家が幾日も費やして一つの生命を救い、手術の卓越性が人々に奇跡とたたえられる。他方、一つの憎悪の爆弾が一分間のうちに幾百幾千の無辜の生命を破壊する。人類は聡明であり、万物の霊長であると名のつっているが、人類がなした愚かな事も、万物のなかで第一である。

(二)

人類が動物から変化して人間になったことを回顧すると、はじめの標識は、自然人、生物人から進歩して社会人になったことである。これは一つの質的飛躍である。昆虫（蜜蜂や蟻など）にも社会性があるが、彼らの社会性は自覚的でなく、本能的であるので、繰り返しがあるだけで、発展がない。千万年前の蜜蜂や蟻と今日の蜜蜂や蟻とは、ほとんど同じである。ところが、人類は社会化して以後、絶えず地球全体を変え、また人類自身をも変えている。人類の勢力は絶えず拡張して、他の生物種の生存空間を占拠し、種はしだいに減

少して絶滅する。自然界が略奪され、生存環境が人類に奪われることがその重要な原因である。

人類に高度な文化があった時期は、ヨーロッパからアジアまでの文献の考古資料によれば、だいたいみな五、六千年を越えない。文化が高度に発達した時間は、さらに少し短いかもしれない。歴史の記載によれば、ヨーロッパ、アジアはみな三千年を越えない。西洋は古代ギリシャから数え、中国は春秋戦国から数える。アメリカのマヤ文明、アフリカの古代文明は、材料不足のため、我々は多くの評論をするまでもない。

アジアとヨーロッパの人類のこの三千年来の発展の重要な標識は、それらの宗教と哲学である。人類の文明の起源は宗教にあり、宗教は知識の母である。このことは事実である。人類が宗教を持ったのは、人類が自己を発見した第一歩である。宗教が人間と自然、人間と人間、実際に知っている世界と未知の世界とがどんな関係かに触れはじめると、古今の宗教学者は、みなまじめに探求と解答を試みた。

社会構造、地理環境、生活条件の相違によって、ヨ

ロッパの宗教とアジアの宗教はそれぞれ自己の道を歩み、長期にわたって独立して発展し、しだいに独特の文化伝統を形成した。ヨーロッパには真つ先に産業革命が生じた。この変革は生産の飛躍的な発展を促進し、産業の革命は人類の社会関係を変え、家族的な小生産から社会化した大生産に変化し、生活方式を変え、社会構造を変えた。古代社会の政治と宗教の関係を变え、政治と宗教は分離しはじめ、現代の国家組織の形式を生み出した。工業の大生産は科学技術を推進し、自然科学は十六世紀より以後、迅速な発展を遂げた。

アジアの中国は西洋と異なる別の道を歩んできた。中国の各民族は、長江・黄河の二大流域の広大な地域に生息し、活動地域の大きさはほとんどヨーロッパに相当し、春秋戦国の時期、人々は多民族の大きな統一された国家を建設しようとした。秦漢の時期、このような構想は現実となった（西ヨーロッパはローマ帝国の解体後、統一された大帝国を建設することは一度もなかった）。中国は多民族の統一国家を建設し、人民はそのなかからいくらかの実際的な利益を得た。たとえば統一した

大国は国家権力を利用して内戦を消滅させ、統一した大国の総合的な国力は、全国人民の財力、人力を集中させ、長城を作って侵略を防止したり、運河を建設して南北の経済交流を疎通させるなどの巨大な工事建設に従事した。全国的な文化建設に従事し、大型の圖書を編集制作し、全国にあまねく行われる政府の文字を制定し、中国の果てしなく広い地域と方言の隔たりの障害を克服して、全国の政令の統一に役立てた。全国の統一された官吏のもとで、政令を用いて、全国の物資を調整し、凶年には食糧を調達して農民を豊作の地方に移して食べさせた。多民族が長期にわたって共存し、政権の指導者は漢族であってもよいし、また少数民族が皇帝になってもよいが、統一の政権の構造も変わらず、儒教を奉ずる宗教信仰も変わらなかった。秦漢から一九一一年の辛亥革命まで、中国は統一された宗教、儒教を信奉して国教とした。さらに提起するに値することは、儒教の絶対的な政教一致であり、皇帝と教主は合して一人であり、皇帝は教主であり、教主は皇帝であった。ヨーロッパの国王の戴冠は教皇に支

持されて、はじめて合法と見なされた。中国の皇帝は自ら「天子」（神の子）と称し、皇帝はもとと教主にはかならない。数千年来、中国には教皇と王権の争いはなかった。

儒教に完備した体系を与えた經典は、儒家の『四書』、『五經』であり、これらの儒家の經典を、二千年来、政府は全国であまねく用いられる教材と規定した。このような教材によって、全国の各民族の青年を教育し、彼らに定期的に国家試験に参加させ、政府はそのなかから各級の官吏を選抜した。各級の官吏は、民政、司法の管理を除いて、同時に神職の職員の役目を兼任し、地方の山川の神祇を祭祀し、祈雨、禳災を行なった。

大統一された中国と西洋は、二つの異なる道を歩んでいる。ヨーロッパは、産業革命を経て、比較的早く近代社会に入り、政治と宗教は分離した。近代科学の分業は比較的細かい。もともとすべての学術を包括した宗教は、しだいにそのなかから哲学、文学、自然科学を生みだし、当時の社会の生産発展の需要に適応した。たとえば古い歴史を持つオックスフォード大学、

ケンブリッジ大学は、教会から分離したものである。中国の古代社会は、ヨーロッパのような産業革命を経なかった。中国の学校は、二千年以上にわたって、終始、儒教のスコラ哲学的な学風を保持した。したがって、中国の哲学と経学は、長期にわたって混じりあって分かれなかった。

(三)

生活に対処し、社会を認識することは、自然の認識にくらべて多くの困難がある。なぜならば、人間は認識者として、すべて各民族伝統の民俗、言語、道德規範の薰陶のなかで形成されたものであるからである。同一の事がらに対処するとき、異なる地域、異なる国家、異なる民族には、異なる評価の基準がある。たとえば夫婦関係、親子関係、信仰の自主的な選択権、政治の選挙権、生存権など、異なる人民大衆には、異なる理解がありうる。計画出産について、ある国家は国策と定め、ある国家は人道違反、道德に違反する犯罪と考える。同性愛については、ある国家は個人の権利

と考へ、ある国家は非合法であると考え。民主、平等などの現代の政治生活の基本概念に対する不一致はさらに大きい。ある国家は生活の基本的な衣食の需要を解決した後、選挙権はデモクラシーの最も重要な標識となった。飢餓線上にある国家においては、何とか生き延びようとすることを、選挙権よりもずっと重要であると見なしている。相違する双方のどちらが正しいかをあげつらうことは、当面の主な任務ではなく、大事なのは、異議を持つ相手の実際の状況をまず理解することにあり、世界のほとんどの人民大衆は異なる信仰を持っているのである。多くの宗教のなかには、また原始宗教、人文宗教がある。原始宗教は、経済や文化の未発達な地域に流行し、さらにまた人種、民俗、歴史伝統の相違によって、異なる宗教を生み出した。同一の宗教のなかで、さらにまた異なる教派がある。宗教の述べることは天国に関する問題であるが、現実の生活（政治的、経済的、文化的、民族的）と密接な関係にある。ただ関係するばかりでなく、切り離すことのできない内在的な関係がある。中東地域が、もし地下

に豊富な石油を埋蔵しているのではなく、また石油を保有しているものがいくつかの弱国でないならば、今日の中東地域が毎年絶えず衝突を生じることはないであろう。ある学者は信仰の衝突と考へ、またある学者は石油の利益の衝突と考へる。問題は複雑であり、我々は宗教の名目のもとに含まれる事実の複雑性を、十分に計算に入れなければならない。もし我々がこの現実を無視するならば、それは、すでにある混乱にさらに新しい混乱を増やすことに等しい。異なる意見は、共通点を求めて相違点を残すことができ、また一度の学術会議で一致した結論を得る必要もないし、またそのようなことはできない。共通点を求めて相違点を残すことは、学術会議の最も良い選択であり、「共通点を対してどのような貢献をなすことができるか、人民大衆間の距離を縮め、社会に幸福をもたらし、平和を擁護し、敵視し障壁を作る要因を除去することについて探求することである。さまざまな教派の相違、信仰の道の選択については、相違点を残すことができ、容認

して異なる声に傾聴し、共感的に異なる意見を理解する。広い気持ちで、寛容な度量を示すのである。

(四)

二十一世紀の全人類がともに体験する困惑に直面し、東洋・西洋の有識者は、みな種々の構想を提出し、苦境を克服しようと試みた。最後に、苦境は人類が自ら作ったものであり、人類が前進するなかでの不幸な遭遇であることを発見する。

人類は地球上に生存しており、自分が依存して生活している環境を正しく扱わなければならない。環境を変えて利用しなければならないし、また環境に適応しなければならない。遺憾なことに、これまで、人類の知力は主に自然の開発に用いられ、世界を変えるために、すべての精力を投入した。近現代のいくつかの科学技術が新たに達成されたのは、すべて自然を変えた成果に属する。どのように人類自身を認識するか、どのように自然に適応するかについては、注意が十分でなく、ひいては完全に無視された。我々人類は自ら万

能であると考え、自己の智慧と能力がいったいどのくらいあるのかを考えようとしなかった。

人々が出合った困惑は、まだ正確に自己を認識せず、真面目に反省せず、ひたすら外に向かって追求した結果による。難題は自ら出したものであり、自ら解答するしかない。中国の偉大な歴史学者、司馬遷は、彼が『史記』を執筆した目的、志は、「天人の際（関係の意）を究め、古今の変を通ず」ることである、と言った。ここで提出された「天」は、自然界を包括し、また神に関する信仰などの、自己以外のすべての存在を包括する。人と天の関係をどのように正しく取り扱うかが、司馬遷が二千年以上前に提出した一つの課題である。今日においてもまださらなる探究を待つ古い課題である。宗教は「天人の際」という広大な領域を探究する学問にほかならない。

西洋では比較的早く近代化を歩んだことによって、社会科学の分業はとても細かく、その一部の内容は、哲学と科学に編入された。宗教神学の管轄領域は縮小された。実際、「天人の際」の「天」は、範囲がとても

大きく、それは「至大にして外無し」であり、認識の主体自身を除いて、すべて「天」の範囲に属する。「天」は複雑で変化の多い存在である。「天」に対しては、それを承認しなければならないし、それを尊重しなければならない。「天」は、人の言いなりになる材料ではない。「天」には変化、発展がある。「天」は万物と内在的關係を持ち、有機的な全体であり、分割することはできず、固定した環境に置かれ、人々の観察、実験に供される。「天を知る」には、「全局面を全体的に観察」しなければならない。全体の局面はまたほかの「人」を包括する。ただ自己の必要を思うだけで、まったくほかの人の必要を顧みず、ただ自己の願望を考慮するだけで、まったくほかの人の願望を顧みないならば、十分に「天を知る」ことはできない。

早くも二千年以上前の莊子において、すでに客観的な天を観察するには、全体の局面を見渡す観点がなければならず、冷静に人類の認識の局限性、一面性を認識しなければならないことが指摘された。彼は人々に、いかなる事物を観察する場合も、ただ一つの角度だけ

から観察することはできず、多くの角度から観察すれば、間違いは減少する、と注意を与えている。もし自然に対して略奪の利益を見るだけで、略奪の害悪を見なければ、またただ戦争の利益を見るだけで、戦争の害悪を忘れれば、きわめて大きな誤りである。彼は多角度の観察方法の例として、「道を以て之れを觀じ」、「物を以て之れを觀じ」、「俗を以て之れを觀じ」、「差を以て之れを觀じ」、「趣を以て之れを觀」するなどの位相を変える観察法を提出した。このような多角度の位相を変えた観察法は、二千年以上前に提出されたが、今日見ても、かつしてその新鮮味を失っていない。今日、我々の一部の人は、まだ莊子の思惟の深さに遠く及ばない。このことは人々に真面目に反省させざるをえない。困惑の原因はどこにあるのか。とりもなおさず、物質世界に対する注意は多く、人類自身の能力に対する認識は少ないことにある。人類は知識の構造のアンバランスの病にかかっている。科学技術の足はとても長いが、人文科学の足はとても短い。

当面の急務は、科学の足を短く切断することではな

い。すでに長くなったものを、短く切ることではできない。そうではなく、できるだけ速くもう一つの短い足を鍛錬して伸ばし、数百年の長期にわたるアンバランスの苦境を改善することである。このような知識の構造の半身不随は、一つの国、一つの地域の偶発的な現象ではなく、世界にはびこるいつも見られる病であり、多く発生する病である。ただ十分に人類の積極性を發揮し、衆知を集め力を合わせ、根気よく続けられ、はじめて改善することができる。数百年の間、積もり来った宿病は、もちろん一朝一夕に治癒することはできないが、いったん効果が現われると、これは幾千幾百年の間影響し、人類の無数の人に幸福をもたらすことのできる事業となるであらう。

中国の国情によれば、中国の活路は、儒教の中国における影響を深く認識分析し、その利害を徹底的に究明し、取るべきは取り、捨てるべきは捨てなければならぬことであり、すでに多くの有識者の関心を引き起こしている。ほとんどの人に共通認識を得させるには、まだ時間が必要であるが、解決の方法は、ただ

「百家争鳴」、交流を深めるだけである。道理は論ずれば論ずるほど明らかとなり、議論の中で迷いを除き、真理に近づくことができる。我々は自信満々で明るい未来を期待している。

今日の中国はすでに世界の文化の外に孤立した旧中国ではない。ただ世界のすべての先進文化の長所を巧みに吸収し、自己の欠点を補い、文化の交流を通じて、相互の理解を深め、共通認識を追求し、手を携えて人類社会に幸福をもたらささえすれば、明るい未来に向かつて進むであらう。

(にん けいゆ／中国国家図書館館長)
(訳・かんの ひろし／創価大学教授)